

避難所での被災者の血液検査を通じて 生活習慣病の早期発見と予防へ



ケアプロ株式会社 様



駅ナカでのワンコイン(500円)健診など、血液検査の出張サービスを展開するケアプロ株式会社様。同社では、メンバーを被災地の避難所に派遣し、被災者に無料で血液検査を実施。検査活動のデータは、病気の早期発見や経過報告に活用されました。

ケアプロ株式会社とは ...

ケアプロ株式会社様は、代表川添高志氏が東京大学医学部付属病院で看護師として糖尿病患者と出会った際に健康診断を受けずに重い合併症に患ってから入院している現状に問題意識を持ち、事業を構想。看護師・保健師を中心メンバーに設立された。自営業者や主婦、フリーターなど、健康診断の機会がなかったり、日中は忙しくて健康診断を受けられないという人たちに、“ちょっと立ち寄り、ちゃんと健康”をコンセプトに、手軽にできる生活習慣病関連の血液検査を提供。事業を通じて、現代日本人の健康増進・予防はもちろん、我が国の医療費抑制への貢献も果たしていきたいと考えている。

東日本大震災の避難所生活では、不眠や栄養の偏り、運動不足による高血圧や糖尿病などの慢性疾患の進行が懸念されていた。そこでケアプロでは避難所内で実施可能な自己検査キットを用いて、延べ453名に対しHbA1c(糖尿病)やアルブミン値(栄養状態)などの血液検査を実施した。検査データはデータベースに蓄積し、医療機関と情報を共有。緊急に治療が必要な患者は提携病院への搬送を行うなど、被災地における生活習慣病の早期発見につなげた。

被災者の状況を把握するため 合同でアセスメントを実施

3月11日の東日本大震災後、多くの被災者は避難所に逃れ、長期間の避難所生活を余儀なくされることとなった。被災者支援のために、国や自治体、NPO団体など様々な人たちが支援へと動き出した。しかし、そこで大きな問題になったのが被災者の状況把握である。

どこにどんな人たちがいて、何を必要としているのか当初はまったくわからない状態だった。そのため、一つの避難所で炊き出しの数が複数来ているの

に、隣の避難所には何も届いていない、または食料が届かず医療支援だけが入るといった事態が起こった。NPOが支援に入るにしても、まず状況を把握するためのアセスメント*をしなければならない。そう考え、全国のNPOが連携し「被災者とNPOをつないで支える合同プロジェクト(つな

プロ)」という組織が立ち上げられた。ケアプロはこのプロジェクトの一員として合同で避難所でのアセスメントを行うことになった。「ケアプロは当初、このアセスメントのサポートや現地でどのような医療ニーズがあるのかを調査し、それを行政や医療機関につなぐマッチングの役割を担うために被災地に入りました。ケアプロではもともと生活習慣病の早期発見と予防のための検査活動を行ってきました。それは被災地でも求めら



代表取締役
川添 高志 様

れているものだったのです。アセスメントに関しても、単に被災者に質問するよりも、避難所でケアプロの看護師が健康相談などに乗りながら聞いたほうが、困っていることを引き出しやすいのではないかとということもありました」と、アライアンス開発部長・看護師の平間佳明氏は支援活動参加の経緯をそう語る。

*アセスメント：起きた事象に対してどのような影響を与えるかを予測、調査し、評価すること。



アライアンス開発部長・看護師
平間 佳明 様

避難所での感染症予防のため、 ボランティアの体調管理を進める

平間氏たちケアプロのスタッフは、3月28日に被災地石巻市に入った。現地での活動の目的は大きく3つ。ボランティアの体調管理と、被災者への血液検査。そして検査を通じたアセスメントによる現状調査である。

現地に着くと、すでに被災地では感染症が流行っていた。当時、100人単位でボランティアが支援活動を始めており、ボランティア自身によって各避難所に感染症を広げてしまう危険性があった。

「特に、当初は水道が止まっていて水も流れませんし、衛生状態が非常に悪く、感染症が広がる危険性が高かったのです。ボランティアの方々は、厳しい環境での忙しい活動の中、なかなか自分の健康管理まで手が回りません。そこで、最初に取り組んだのがボランティアに対する体調管理でした」

早期に平間氏を中心に医療部隊を編制。ボランティアの体調を管理し、感染者が出た場合はすぐに隔離するか帰宅させるという処置を取った。こうして、初期には100人中14名の感染者が発生していたが、翌週からは100人中1人程度にまで減らすことができた。

その後、水回りやトイレが改善され、感染症自体が下火になったこともあり、次に被災者の無料血液検査による健康診断へと移っていくことになった。

病気の早期発見へとつなげる 避難所での無料血液検査を開始

避難所では、日々菓子パンやお菓子、おにぎりなどが被災者に配られる。そのような食生活では栄養状態は当然悪くなる。

「高齢者の中には毎日菓子パンなんか食べたくないということで、食事を取らないという人も出てきました。また、糖尿病や高血圧など慢性的な病気を持っている方たちも結構いらっしゃいました。そうした人たちは、食事の偏りや運動不足に陥りがちな避難所生活で、持病を悪化させている可能性もあったのです」

避難所で生活する人たちの健康をチェックすることで、病気の早期発見、医療機関での早期受診へとつなげる。こうした目的で、避難所での無料血液検査が始められることになった。

健康チェックでは、最初に血圧を測定。問診を行い、既往症などを書いてもらい、血液検査を行う。ケアプロで行っている血液検査は、指先から1滴採血するだけで済む。検査では、血糖値、総コレステロール、中性脂肪、肝機能など8項目のデータが取れる。普通の生活ではそれだけのデータが取れば、十分に健康状態を把握することができる。



ボランティアによる健康チェック

活動レポート

避難所では移動が多く、その場で検査結果がわかるのがメリット

ケアプロの血液検査の一番のメリットは、血糖値は15秒、総コレステロール、中性脂肪は3分、その他も全て5～7分以内にその場で結果がわかるということである。



血液検査は指先から1滴採取するだけ

初期の頃は郵送健診などの方法も取られていたが、返信されるまで1週間かかり、結果が戻ってきた時には本人がその避難所にいないということもあった。また、大きな避難所では500～1000人の被災者がいて、一人ひとりに検査結果の封筒を届けることができず、体育館の片隅に積まれたままということもあったと言う。

「市の健康診断がストップしていましたので、かなりの人が来てくれました。検査結果が出るまで7分ほどかかりますので、その間の雑談で『最初は自分でも気づかなかったのだけれど、眠れなくて』とか、『薬が流されてしまって困っている』といった隠れた健康ニーズを拾うこともできました」

結果が出ると、それをもとに簡単な健康相談などを行う。その場でどうしようという相談ができるので、被災者の方々からも喜ばれたと言う。



アセスメントで得た情報はデータベースで管理

蓄積データを医療機関と共有 患者を提携病院につなげる

5月1日から6月26日までの間に、石巻市を中心に7カ所の避難所を回り、延べ453名の被災者に血液検査を行った。

全ての検査結果は、データベースに蓄積された。情報を蓄積する仕組みとしてSaaS型アプリケーションサービス「CRMate（シーアールメイト）／お客様接点力」を富士通が提供し、活動の協力を行った。

検査は、看護師、問診担当、ボランティアの3人一組で役割を決めて取り組んだ。平間氏たち看護師は血液検査。問診を担当する者はその場で持ち込んだパソコンに検査結果やアセスメントの質問に対する回答などを入力し、情報管理をする。そしてボランティアの人たちが列を整理した。

「検査活動では、検査結果をしっかりと医療機関につなぐということが重要です。郵送健診ではそうしたことができていなかったのですが、今回は蓄積したデータを医療機関と共有することで、早期の治療へとつなげることができました」

検査の結果、緊急に治療が必要な患者は、提携先である石巻赤十字病院や東北大学病院の糖尿病専門医の医師につなげるなど、多くの事例をつくることができた。また、避難所ごとの検査結果を近隣から往診する医師に伝え、必要な人には診察・処方をしてもらった。

従来、Excelで入力していた時には、それらのデータをメールで送る必要があり、メールの転送漏れなどもあった。それがシステムで共有されたことで、連携がスムーズにできるようになったと言う。

検査活動を集計し、結果報告と改善のための必要施策を発表する

つなプロとケアプロが被災地で行った合同調査についての集計結果の報告は『被災地での生活習慣病の早期発見と予防のための検査活動の経過について』という形でまとめられ、7月にプレスリリースされた。

集計結果からはいろいろなことがわかってきた。「震災後、高血圧になりやすいというデータは以前からあったのですが、実際に血圧を測定してみると、4～5割の人に高血圧の診断が出ました」

一般に高血圧は脳卒中や心筋梗塞、心不全、肝不全などの合併症を引き起こす原因の一つになる。「よく眠れていない」「ストレス」「運動不足」「塩分の取り過ぎ」等が高血圧を引き起こした可能性として浮き彫りになった。

様々な分析結果から、「避難所におけるストレス解消のためにプライバシー保護を行う必要がある」「栄養バランスのとれた食事を提供する必要がある」「ラジオ体操・ウォーキングイベント等の継続的な実施によって運動不足を解消する必要がある」等の改善のための必要施策を示すこともできた。

ナレッジの蓄積を 地域の自立支援に活かす

「情報を蓄積し、分析を進めていくことで、訪問看護の際に医師とともにデータを見ながら、病気予防のケアを行っていただける可能性があります。今後も医療機関を含めた連携を深め、ナレッジの蓄積を進めていきたいと思っています」

医療には2種類ある。1つは病気になって、それ以上病状を悪化させないためのもの。それが通常の医



療機関の役割である。そのため、患者側では病気になってはじめて医療機関を活用することが多い。医療機関側でも病気になってからでないと医療報酬が得られないので、診察ができない。一方で、悪くなる前に予防するという医療の考え方もある。例えば、蓄積した情報を活用することで、地域の訪問看護の人たちが血液検査の過去の推移を事前に把握できるようになる。それをもとに予防を行ったり、病気を早期の段階で発見し、医師の介入につなげることもできる。そうしたセーフティネットを築いていけたらと、被災地のこれからを平間氏はそう語る。



被災地では今、復旧復興のフェーズを迎えている。いつまでもボランティアに頼ってばかりはいられない。被災地域自身による1日も早い自立が求められている。その際にも、地域医療を連携するネットワークの仕組みや、地域住民の健康情報の蓄積・分析が役立っていくに違いない。

（山田稚佳子）

写真提供：ケアプロ株式会社

※記載されている製品名などの固有名詞は、各社の商標または登録商標です。

■製品・サービスについてのお問合せは
富士通コンタクトライン（総合窓口）
0120-933-200 受付時間 9:00～17:30
(土・日・祝日・当社指定の休業日を除く)
富士通株式会社 〒105-7123 東京都港区東新橋 1-5-2 汐留シティセンター
CRMate / お客様接点力のホームページ
<http://jp.fujitsu.com/crmate/>

みんな、つながる

CRMate